

ダイバーシティ国家 マレーシアの苦悩

強かな外交戦略と都市計画、内政の混乱と人種・格差問題
シンガポールとの比較を交えて

12.5期 杉山よしひろ

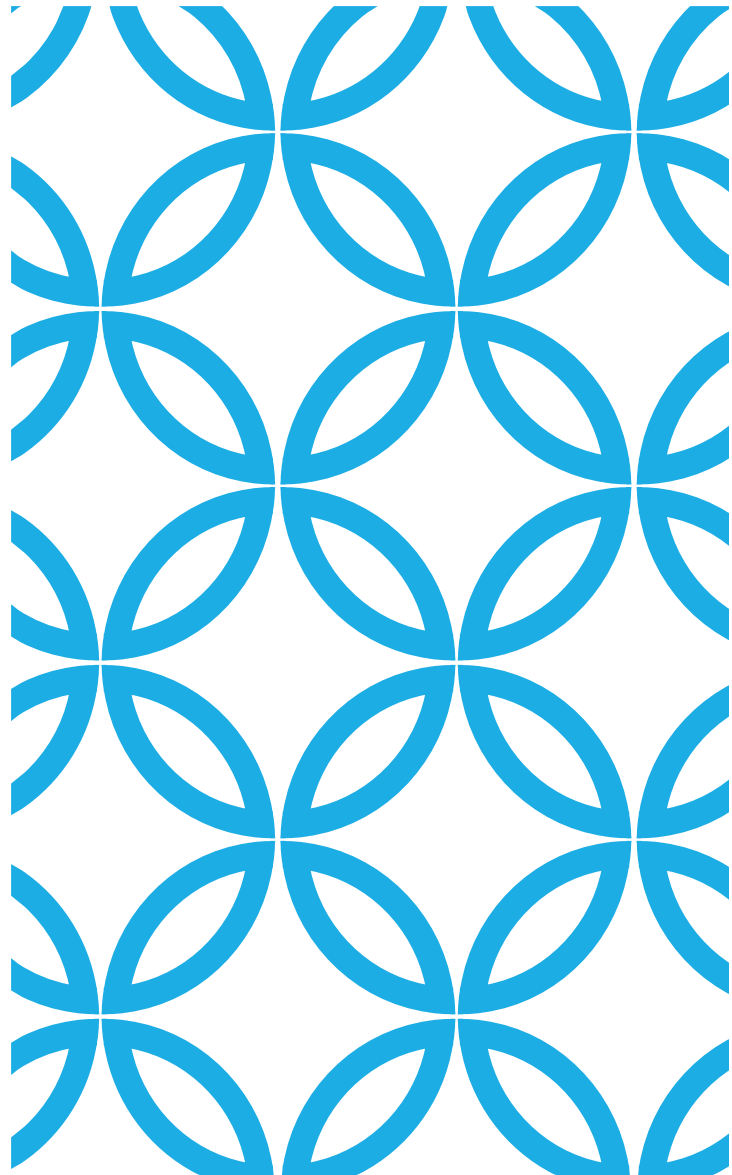
歴史

マレーシアとシンガポールの歴史

共通の歴史

- 元々はマラッカ王国として同じ国だが、交通の要衝であることから中国、ポルトガル、オランダなどの侵略を受け続け、19世紀後半から第二次世界大戦まで、イギリスが植民地支配
- 政治、経済、社会システムにおいて深い繋がり。
- 多民族国家：マレー系、華人、インド系などが混住
- **マレーシア:**
 - 1957年にイギリスから独立
 - 1963年にマレーシア連邦を結成、シンガポールも加盟
 - 民族間の対立などから、1965年にシンガポールが連邦を離脱
 - 民族宗教 マレー系70%、中華系22%、インド系7% 主にイスラム教
- **シンガポール:**
 - 1965年にマレーシアから独立
 - リー・クアンユー首相を中心とした強力なリーダーシップのもと、経済開発を優先
 - 現在では世界屈指の経済大国
 - 民族宗教 中華系74%、マレー系14%、インド系9%
 - 仏教33%、道教8.8%、キリスト教18.9%、イスラム教15.6%、ヒンズー教5%、無宗教20%





政治

ルックイースト・マハティールだけじゃない
日本から見ていたマレーシア像との違い

内政

・マレーシア:

- 議院内閣制を採用
- 国王を国家元首とし、首相が政府の首班
- 独立以来、マレー系UMNO中心の長期政権
- 2018年総選挙でマハティール率いる多民族野党連合による初めての政権交代。以降3度の交代でアンワル政権。

・シンガポール:

- 議院内閣制を採用
- 大統領を国家元首とし、首相が政府の首班
- 一党優位制：人民行動党が長期政権。リー・クアンユー、ゴー・チョクトン、リー・シェンロンと「リー家」中心のトップエリートが主導するも、2024年5月に初めての「庶民派首相」と言われるローレンス・ウォン首相が就任

マレーシアとシンガポールはどちらも議院内閣制を採用しているが、国家元首の称号と役割が異なる。マレーシアは国王を国家元首とし各地でも王制。

シンガポールは共和国制を採用し、大統領を国家元首とする。

シンガポールは人民行動党が長期政権を維持する一党優位制が続く

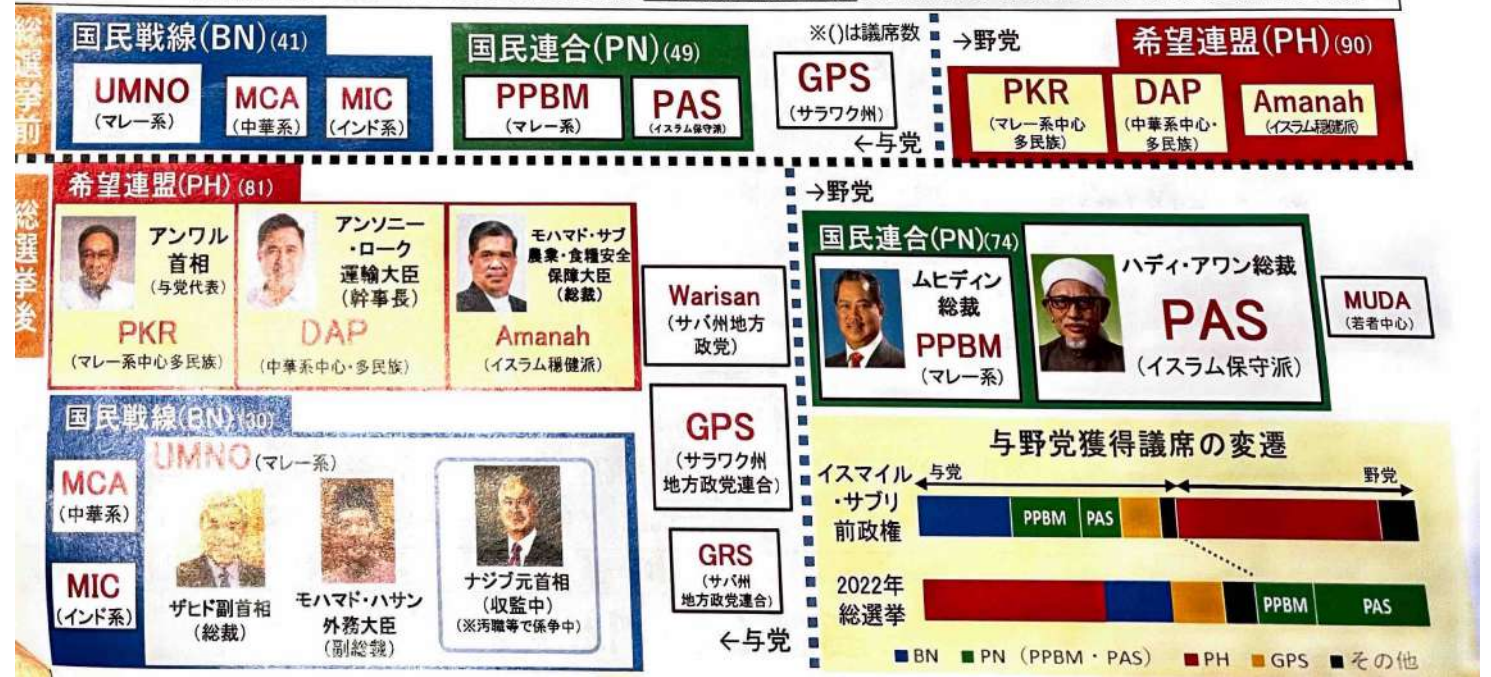


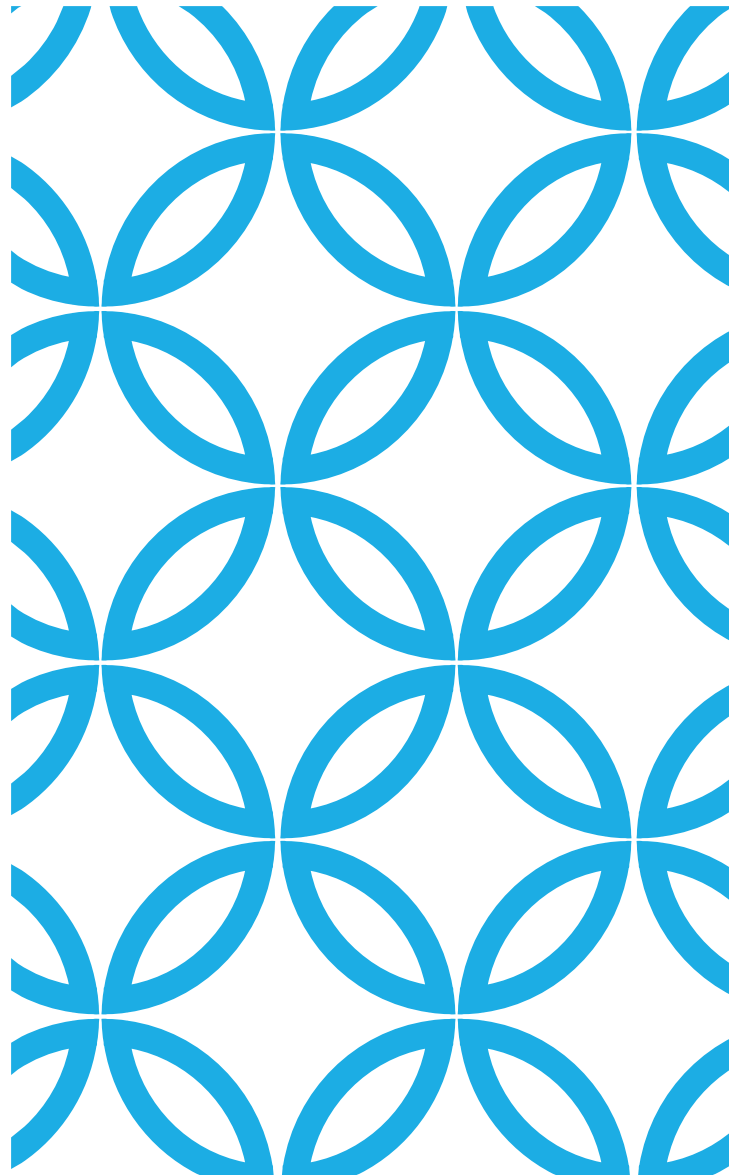
マハティール以後 3度の政権交代 政党の多様化

独立以来、長期政権を維持してきたマレー系UMNOが弱体化。イスラム保守派の台頭。

マレーシア内政

- 1957年の独立以来、マレー系UMNOが中心となって長期政権を維持してきたところ、2018年総選挙で、マハティールが多民族の野党連合を率いて史上初の政権交代を実現。
- その後、2020年3月、総選挙を経ずに、UMNO及びPAS（マレー系のイスラム保守派政党）と組んだムヒディンによるPN政権が発足。さらに、UMNO一派による首相不信任の表明を受けてムヒディン内閣は総辞職し、2021年8月のイスマイル・サブリ首相就任によって、UMNOが首班政党に回帰。
- 2022年11月に実施された第15回総選挙（GE15）の結果、BNが大幅に議席を減らした一方、PNが躍進。野党であったPHが最大の議席を維持したが、いずれの政党連合も単独で過半数を獲得するには至らず。国王が挙国一致内閣を求めて仲介した結果、PHがBN及び地方政党等を巻き込み、2022年11月、アンワルを第10代首相とする連立政府が樹立された。
- 2023年8月に実施され、アンワル政権に対する事実上の信任投票と目された6州州議会選挙では、いずれの州でも政権交代は発生せず現状維持となった一方、GE15に引き続きPNが議席数を増加させた。また、12月には、内閣改造が行われた。





国際関係

多極主義とバランス外交を軸にした強かな外交戦略で
高まる国際社会での存在感

外交

1. マレーシア外交の基本理念

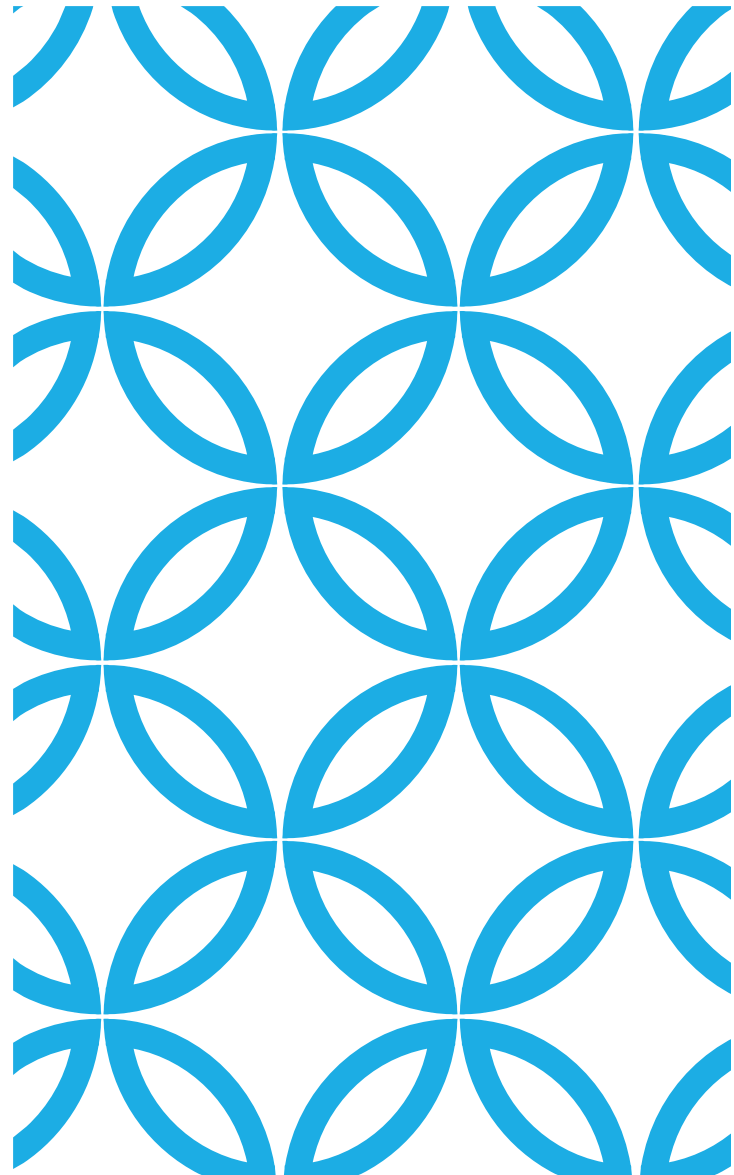
マレーシア外交の基本理念は、以下の3つに集約

- **中立主義:** どの主要国にも偏ることなく、中立的な立場を維持する
- **平和主義:** 国際紛争の平和的解決を積極的に推進する
- **南南協力:** 途上国間の協力を促進し共に発展を目指す

2. 多極主義とバランス外交

近年、マレーシアは**多極主義**外交を積極的に推進。親米・親日路線のマハティール以降、アメリカ一極支配ではなく、中国、インド、ロシアなどの新興国も含めた多様なパワーが国際社会を主導していくべきという考え方。

対中関係では、一帯一路関連事業もあることから特に経済を中心に極めて関係良好も、経済依存度の高まりや南シナ海での領土問題の当事者として強い警戒感。



首都機能移転の光と影

プトラジャヤへの首都機能移転により起こった効果

マレーシア首都機能移転の成果と課題

プトラジャヤへの首都機能移転は1990年代半ばから段階的に進められ、2000年代に入ってから本格化。当初の目的は以下

- **クアラルンプールの交通渋滞緩和:** 1980年代、クアラルンプールは著しい経済発展に伴い、人口増加と交通渋滞が深刻化。
- **政府機能の効率化:** 省庁が分散していたため、行政運営の非効率が生じていた。
- **情報化社会への移行:** マルチメディア・スーパー・コリドー (MSC) 構想の一環として、IT産業の集積地を形成する目的があった

首都機能の一部をプトラジャヤに移転することで、これらの課題を解決することが期待。

移転の成果

- **交通渋滞の緩和:** クアラルンプールの交通渋滞は大幅に改善。
- **政府機能の効率化:** 省庁が集中することで、行政運営の効率化。
- **MSCの成功:** プトラジャヤと隣接するサイバージャヤは、MSCの中心地として発展し、多くのIT企業が立地。
- **環境に優しい都市づくり:** プトラジャヤは、緑地を多く確保した環境に優しい都市として設計。

課題

- **クアラルンプールの活力の低下:** 首都機能の一部が移転したことで、クアラルンプールの活力が低下したという声がある。
- **移転コスト:** 首都機能移転には多額の費用。
- **プトラジャヤのアクセス:** アクセスが不便。
- **イスラム教色の強い街づくりのため、美しいが酒類の販売がないなど生活の余白が少ない街という印象**



深刻化する人種間対立、ブミプトラ政策

5・13事件

1969年5月10日に実施された総選挙を直接の原因とする、同年5月13日に発生したマレーシア史上最悪の民族衝突事件。

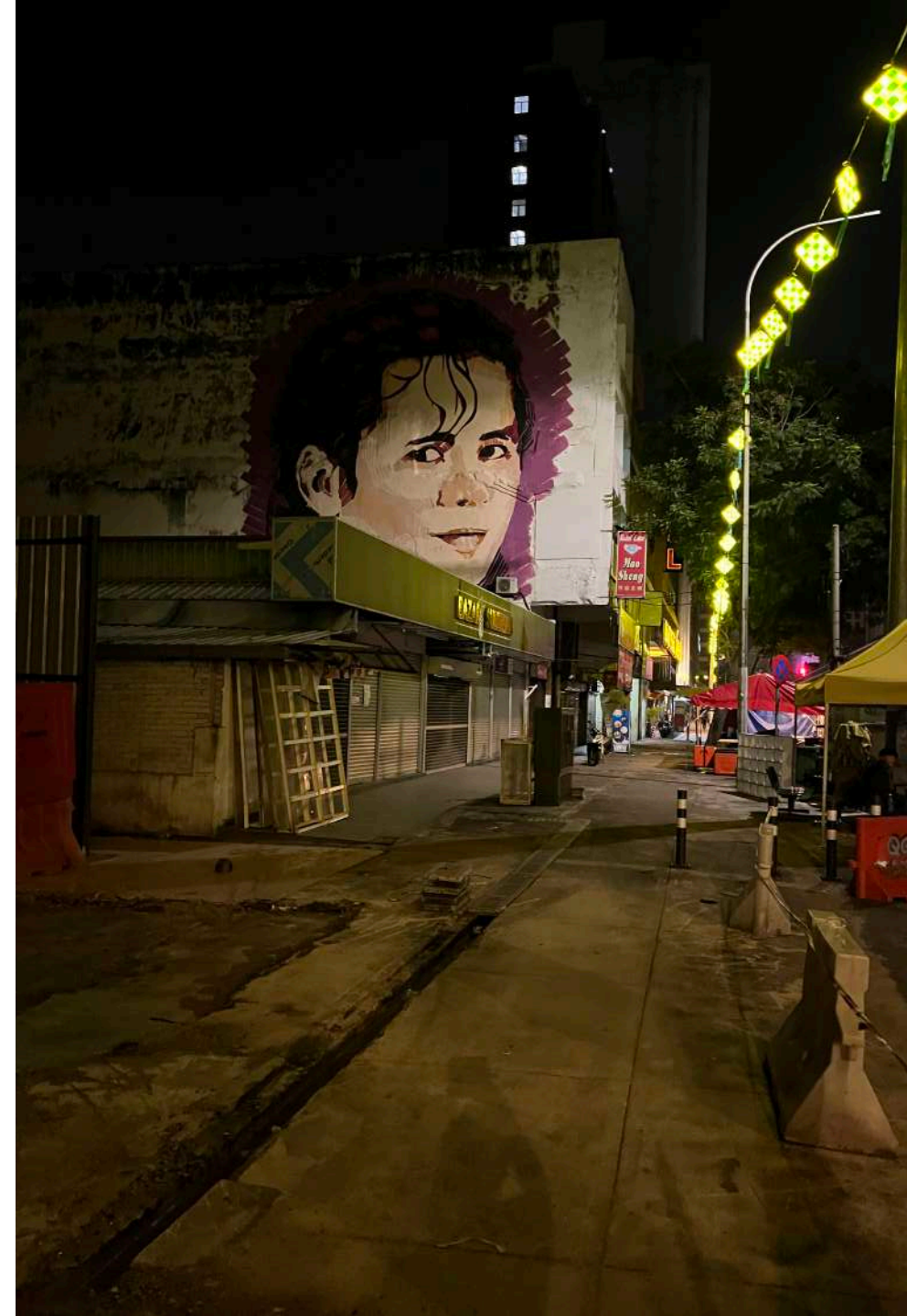
躍進した野党を支持する華人が祝賀行進を行い、その際マレー人に対して扇動的な言動を行った。統一マレー人国民組織（UMNO）はこれに対抗すべく、街頭行進を企画した。そこに結集したマレー人が華人の襲撃を受けたとの知らせが届いた。これにより結集者は反華人感情を高め、抑制不能となり暴徒化し、華人居住区を襲撃するに至った。華人側は秘密結社が中心となって反撃し、暴動は拡大・激化した。

この暴動はほぼ1日で終息したが、銃撃や放火などによって暴動発生後の数日間で死者196人、負傷者439人の犠牲者を出す大惨事となった。

以上はマレーシア政府による公式見解であるが、海外の報道やイギリス政府の公文書によると、マレー人は計画的に暴力行為に動員され、それはUMNO内での既存指導層に対するクーデターの一環であったとする見解も存在する。死者数は800人から1,000人に達したとの推計もあり、マレー人比率の高い軍と警察が暴動鎮圧に当たり華人に対してより強硬に暴力を発動したとの指摘もある。

5・13事件以降、マレーシア政府は民族間の融和政策を推進。

- **ブミプトラ政策:** マレー系、先住民などを優遇する政策。教育、就職、住宅など様々な分野で優遇措置。
- **宗教:** イスラム教を国教とし、イスラム教徒に対して優遇措置。
- **言語:** マレー語を国語とし、教育や行政機関などで優先的に使用。



ブミプトラ後の課題 貧富の格差拡大、新たな人種間対立

効果

- **経済格差の縮小:** ブミプトラ系住民の所得水準は大きく向上し、貧困率も低下。
- **マレー系企業の台頭:** 多くのマレー系企業が設立され、経済におけるプレゼンスを高めた。
- **政治的安定:** マレー系住民の政治参加が促進され、民族間の対立緩和に貢献。

課題

- **非ブミプトラ系住民の不満:** 中国系やインド系住民を中心に、ブミプトラ政策による差別に対する不満が高まっている。
- **経済効率の低下:** 優遇措置が必ずしも能力に基づいていないため、経済全体の効率低下を招いているという批判がある。
- **汚職の横行:** 優遇措置をめぐる汚職が横行しており、政策の透明性や公平性が損なわれている。

近年の方向性

近年、マレーシア政府はブミプトラ政策の見直しを進めている。

- **優遇措置の対象範囲の縮小:** 特に富裕層への優遇措置を縮小し、より困窮しているブミプトラ系住民への支援に重点を置く。
- **能力主義の導入:** 優遇措置の対象となるには、能力や実績に基づいた基準を満たすことを求める。

新たな対立

首都機能移転やコロナ禍の影響によるクアラルンプールでの貧富の格差拡大

中東情勢やイスラム過激化の影響など



まとめ

渡航前とのイメージの違い

コロナ禍前に直近で行ったシンガポールと、今回訪れたマレーシアは同じような国だと思っていたが、近年の歴史的にも人種や宗教的にも全く違う国であった。今でも日本人の多くがマハティールしか知らないが、近年の内政においては多様化複雑化していた。

一方で、ルックイースト政策だけでなくマラッカ海峡とマレー半島が文化と交通の要衝にあったという歴史的な経緯から、大国との等距離外交や中立主義など、強かな外交戦略を持つ国でもあった。

ダイバーシティ国家の理想と現実

都市の発展は目覚ましいが、一步裏に入れば人種と貧富の格差が現実にある。多民族国家ではあるが、主にイスラム教国であるためイスラム世界の変節を受けやすいか？

